

第1章

共同研究「科学と社会」について

平田光司

hirata@soken.ac.jp

研究代表者・教育研究交流センター/加速器科学専攻

1.1 この共同研究の目的

現在、「科学と社会」に関して様々な問題があることは誰でも認めると思います。しかし、では何が本質的・根本的な問題であるかについては、各人がそれぞれ異なる認識を持っている、というよりむしろ、確固とした認識を持つ人は少ないのではないのでしょうか*1。

総研大基盤機関の行っているような基礎科学においても、

*1 教育研究交流センターにおける本共同研究趣旨説明より（2000年4月）。

- 「生命倫理を動揺させている」など、一般社会のもつ、科学に対する漠然とした恐怖感、
- 「科学は十分進歩したので、もう巨額な研究はしなくてよい」から「科学は悪だ」まで様々なバージョンの「反科学」、
- 小学生から大学まで見られる「理科ばなれ」、さらに研究者にも見られる「知識の空洞化」、
- すぐに成果を上げ、実社会に役立つ研究への圧力、

など「基礎科学の危機」と考えられる状況を実感している研究者も多いと思います。今後とも基礎科学を発展させていくには社会との調和を深刻に考える必要があります。基礎科学、科学研究に対する批判、反感に対して、科学者の側からも社会への説明、社会との対話に努力するのは当然ですが、個別の批判への対応だけで十分とは思えません。基礎科学のさまざまな専門分野は、それぞれ分野固有の問題をかかえているでしょうが、その中から一般的、根元的な問題を採り出し、それらを総合的に検討する場が必要とされていると思います。日本を代表する最先端の基礎研究を行っている大学共同利用機関を基盤とする総研大は、このような問題にとりくむには最良の場であるだけでなく、そのような研究が最も必要とされる場でもあるのではないのでしょうか。

本共同研究は、総研大および基盤研究機関の研究者が、この重要な問題を学問的に考えるための場を提供し、科学研究活動の社会的側面について、また、それを科学研究に反映させる方法について研究するものです。本共同研究は同時に、そのような研究活動のためのフィージビリティスタディとも考えられます。その成果は基盤機関のアカウントビリティにも反映されると同時に、日本、世界の科学の将来にとって重要な貢献になり得るものと考えます。

メンバーは常に「募集中」です。興味のある方は代表者までご連絡ください。(本共同研究のホームページは

<http://koryu.soken.ac.jp/home/kyodo/SS/invitation.html>

にあります)。

本共同研究の成果は、何らかの形で総研大の教育にも反映させる他、必要かつ可能ならば、出版、授業、一般の講演会開催などの形で社会に還元していきたいと思います。また学問分野として形成できる見通しがついたならば研究の大規模化（総研大グループ研究）、新研究機関の設立、新専攻の設立、への拡大も視野にいれておきたいと思います。

1.2 2000年度の活動

本共同研究は、まず、その成立ちからしてちょっと変わっています。

「科学と社会」の研究については、確固とした研究方法が確立しているわけではなく、学問としての新分野です。こういう場合、共同研究メンバーを一定の方針のもとに選択するよりは、ともかく関心のある方に集まってもらい、その中で研究方針も決めていく方が（運営は大変でも）より本質的な発展が望めるでしょう。このため、本共同研究のメンバーは総研大内部で公募し、そのメンバーが決まった後に合議の上で総研大外部からの参加者にも呼びかけました*2。総研大およびその基盤機関の教官、学生は誰でも、そうでない方も現メンバーの了承によってメンバーとなることができることとしました。科学ジャーナリズムの重要性は多くのメンバーが痛感していたこともあり、積極的にジャーナリストに呼びかけ、少数ではありますが、強力なメンバーを獲得することもできました。

*2 このメンバー公募型共同研究は、共同研究実施要項第3条の「センター運営委員会は、……特定の研究課題を選定し、これについての参加者を募集することができる」を生かした初めての試みです。2000年5月末まで参加者を学内公募し、6月のセンター運営委員会で新規共同研究としての承認を受け、スタートしました。

共同研究第一年目にあたる2000年度には、メンバーの問題意識を共有化するために、下の表のようにほぼ毎月研究会を開いてメンバーによる講演と質疑応答を行いました（講演題目は本論文集に記載のものとはほぼ同じ）。

7月7日	東京丸の内ホテル	メンバーの自己紹介と研究方針の確認
9月6日	東京丸の内ホテル	縣秀彦、平田光司
10月31日	東京丸の内ホテル	柳本武美、神沼克伊
12月8日	東京丸の内ホテル	保坂直紀、磯部琇三
1月31日	パレスホテル	柴崎文一、永山國昭
2月16日	パレスホテル	井口春和、高岩義信
3月12～13日	熱海潮音荘	笹尾真実子、鄭躍軍、中川尚子

前述の様に、ある方針の下にメンバーを集めたわけでは無いので、はたして議論がかみあうかどうか心配もしましたが、毎回、様々に異なる視点からの講演＋議論は大変刺激的でした。

なお、現在のメンバーは20名（学内11名、基盤機関4名、学外5名）です。

1.3 本論文集「科学と社会2000」

この論文集の論文は、各メンバーが講演内容をもとに、講演後におこなわれた議論を加味して書かれたものです。共同研究の報告としてよりも、広く総研大内外に批判をあおぎ、今後の研究活動の参考になるものになりたいと考えています。

大体の配置としては以下のようにしました（あまりにも雑な特徴づけであることを、読者にも著者にもお許し願います）。

- 「科学的事実」をめぐる論点（2、3、4章）

- 科学者側の問題点 (5、6、7、8章)
- 社会の科学理解 (9、10、11、12章)
- 倫理のとらえかた (13、14章)

著者の所属で「××専攻」となっているのは総合研究大学院大学の専攻名です。

なお、1999年度湘南レクチャー「社会の中の科学」*)の講義録を出版すべく努力していましたが、断念せざるを得なくなりました。そのためいただいた中島秀人、中島貴子両氏の原稿は、内容的にも本書の趣旨に一致すると考えられることから、本書15、16章として載録させていただきます。

*) 総研大湘南レクチャーは全国の大学院の学生を対象にした合宿方式による短期集中型の授業です。「社会の中の科学」は1999年8月23～25日に葉山で行われました。講義名と講師を以下に示します。

社会の中の科学	平田光司 (研大教育研究交流センター)
科学と科学者の将来	佐藤文隆 (京都大学)
科学技術論入門	佐々木力 (東京大学)
- 原子力テクノロジーを例として	
原子核科学の半世紀	中井浩二 (東京理科大学)
STS とは何か-その理念と実際-	中島秀人 (東京工業大学) + 中島貴子 (東京大学)
SSC 計画	高岩義信 (高エネルギー加速器研究機構)
天文学と社会	磯部琇三 (光科学専攻)
遺伝子技術と社会	立岩真也 (信州大学)
NGO と科学研究	藤原寿和 (止めよう!ダイオキシン 汚染関東ネットワーク)

簡単な報告は

<http://koryu.soken.ac.jp/home/syonan/syounan99.html>

にあります。